

イラン戦争をどう考えるか/戦いの基本的性格

鈴木頌

1、アメリカ・イスラエルがしかけた理不尽な戦争

- * アルカイダを匿ったアフガン、大量破壊兵器保有の疑いのイランと同じく、イラン攻撃の理由も口実に過ぎない。
- * 核兵器保持や人権侵害などの疑いだけで、一方的に攻め込むのは国際法違反の犯罪行為
- * 非戦闘員の大量虐殺、民間インフラ施設の破壊を行えば人道法違反の戦争犯罪

2、中東の覇権を求めるイスラエルと、背後から支えるアメリカに、全責任

- * 大イスラエル主義：旧約聖書に記された「古イスラエル」の最大版図を目指す。誇大妄想。
- * アブラハム合意：湾岸諸国が、アメリカの勧誘で基地を置き、共役関係を結ぶ。抵抗するイランとの関係が険悪に。
- * イスラエルは米国の前線本部となり、中東人民への差別意識を強める。

3、石油など中東資源の支配を強化する国際資本の狙い

- * 石油には探鉱、開発、生産から輸送、精製、販売までがあり、市場独占性に付随して価格決定権、先物調整権等がある。ここから安定的に膨大な利益が生じる。
- * 石油はドル建て決済が基本であり、利益はオイルダラーとなり、兌換性を失った金に代わり、ドルを支えている（米国を支えている）

- * 石油メジャーの本体は地下茎にある。ロックフェラーの本体はエクソンではなくチェース・マンハッタンだ。オイルとドルは直列でつながっている。
- * 石油産業には油田が必須であり、中東で戦火が絶えないのは油田確保のためである。石油支配を OPEC に譲ったという見方は、この歴史を説明できない。

4、自立と自決を目指す中東人民の戦い

- * 産油国は自立を許されない。自立を試みた国はほとんどが滅びた。ほとんど唯一の例外がイランである。為替操作、市場攪乱、経済制裁による新興国、途上国攻撃。
 - * 産油国は自決を許されない。イスラエルへの屈服、ガザ・西岸、レバノンの黙認を迫られる。人権、自由、人道などの思想攻撃、隙あれば武装デモ⇒暴動
 - * そのような中東人民にとって、イランは「抵抗の枢軸」となっている。抵抗の枢軸の戦いは、21 世紀における民族解放の戦いと考えられる。
- * オイルがドルの力の根源であるから、そして油田なくしてオイルはないのだから、中東を失った米国は覇者の座を失う可能性がある（欧米メディアは触れないが）。